

## コラム65：英国の花（2018年8月）

またしても広島で大きな被害です。「またしても広島」というのは、言うまでもなく4年前の「広島土砂災害」の記憶がまだ生々しいからです。今回の「西日本豪雨」は、犠牲者の数も被害地域の範囲も、前回は大きく上回っています。「どうして広島なのか」ということを、TVで専門家が解説していました。その原因が、この地方の土質にあるというのですから、怖い話です。花崗岩で形成されているゆえ、これが風化して細かくなると「まさ土」となり、水を含むと柔らかくなって崩れやすい状態になり、巨大な岩や流木とともに土石流が発生してくる—こんな説明であったと思います。この豪雨があったのは、英国の旅から帰国した翌週でしたから、広島空港への帰国とぶつかっていたら、大変なことになっていました。自動車道も列車も完全に分断されましたからね。

私達が住んでいる日本という国は、人が生活してゆく上で、大変な環境だと思いますね。いつ起こるかかわからない地震に怯え、毎年のようにいくつもの台風が襲来し、さらには豪雨による浸水と土砂災害です。それを受け入れ耐え抜いて、これまで生きてきたわけです。昨今のような異常気象の常態化で、より厳しい生活環境になってきたという気がします。そうは言っても、今さら「それじゃあ他の場所に移住するか」というわけにはいかんですよ。日本中、どこにも安全な所はないのですからね。「こんな日本でなく、英国に生まれたかったなあ！」……

今回の旅で初めて知ったことですが、英国では地震がないんですね。「土砂災害」(?)そんなもの起こりようがありません。何処まで行っても森と草原という風景で、山というのがないのですから。

### ◎英国の花について

ほんの4日間だけの滞在でしたが、なぜか今回の英国の旅で一番最初に目についたのが、花だったんですね。花市場を退職して今年で9年になりますが、長年の仕事で体に染みついた「職業病」かもしれません。街灯や店の軒下に吊るしてあったり、歩道の中の花の塔のような花壇であったり、形式は様々です。品種的にはペチュニアとかゼラニウムとかの、普通の草花なんです。これが実に見事に手入れされて、本当にキレイなんです。最初は、街中の一部の地区に限定して置いているのかと思ったんですが、これが地方の観光地やレストランでも、ざらに見かけたのです。



それ以上に驚いたのは、手入れを怠って、花が傷んだ状態の鉢を一度も見なかったことです。公園などの花壇は傷んでいることがあたりまえで、いつもきれいに管理されている方がマレであるという、私の「今までの常識」は当てはまりませんでしたね。そのうちに、私の中にある疑問が浮かんだのです。あんなに高い位置に吊るしてある大鉢に、どうやって水をやり、花ガラ取りなどの手入れはどうするのだろうか、ということなんです。

<英国の花はどうしていつも綺麗に保たれているのか>—私はこの疑問を今回のツアーの同行者にぶつけてみました。ウインザー城の見学の後で、側のレストランで軽食をした時のことです。たまたま座っていたテーブルの窓越しに大きな吊り鉢が見えていたんで、思わず聞いてしまったんですね。相手の方は、私とほぼ同年輩らしき男性で、花業界の人ではないと思います。「あの花、あんなに高い所にあって、どうやって手入れをするんですかねえ」

すると彼はサラリと事もなげに答えたのです。

「きっと手入れをするのではなくて、取り換えをしているんですよ」

<目からウロコ>とはこのことです。考えて見ると、あんなに大きな高所の鉢を、路上でいちいち手入れなど出来るはずがありません。彼の言うように、作業車を使ってかなりの頻度で取り換えをしている、と考える方が理にかなっていますね。

「そうすると、かなりの予備の在庫もいるし、ずいぶん労力もかかることになりますよねえ」

「花にお金を使うのはあたりまえという考えなんでしょうね」



私が行ったのは、英国のイングランド地区のロンドンからバーミンガムの中のほんの一部の地域のみ、それも4日間だけですからね。これだけで「イギリスは花の先進国」と考えるのは、いささか早計であるかもしれません。そして、このような公共事業的な花の消費でなく、一般家庭の消費はどうなのか、ということも気になります。「イングリッシュ・ガーデン」の言葉どおり、レベルの高い花の消費があるのでしょうか。園芸店や花屋に寄る機会にはなかったのですが、スーパーに行く機会がありました。

旅の2日目、ロンドンから約200kmの距離にある、イングランド中部の工業都市バーミンガムに泊まった時の事です。予定より早くホテルに到着して、時間つぶしに近くのスーパーに出掛けてみたんですよ。かなり大きな店舗でしたが、レジの近くに広いスペースの花売り場がありました。片面を切り花専用で、反対側は鉢物売り場という形になっていましたね。切り花は「バラ売り」ではなく、「束売り」となっていますね。内容的には、カーネーションなどの単品の花束で£3(ポンド)から、バラと菊とガーベラといった(信じられない?)組み合わせの大きい花束で、£12(ポンド)というところ。1ポンド(£)は約150円ですから、450円から1800円ということですか。



鉢物コーナーを見ると、胡蝶蘭の5寸2本立ちが£10(1500円!）、デンドロも£10(今の季節に!）、アンスリウムは5寸物が£5(750円 安い!）、ケイトウや菊の5寸鉢は£2(300円)というところで、概して買いやすい価格設定だと思いましたね。感心したのは、これだけの数の商品がありながら、売れ残りの傷んだ品物は1鉢も見かけなかったことです。私がこのスーパーに行ったのは土曜日の夕方7時半頃、明日の日曜日に向けて商品の入れ替えをしたばかりだったのかもしれませんが。そして、このような買いやすい価格で売れるということは、かなりの量が売れて、かつロスも少ないということではないですか。

花の売り場のすぐ側に、果物の売り場がありました。もしかして— と思って覗いてみると、あったんですよ! イチゴが! 6月の下旬ですから日本のスーパーでは置いていない時期ですよ。



私のハウスでも少しは粗末なモノが残っていましたが、出荷できるような商品ではないので、旅行に出る前に全部の株を除去して、旅に出たくらいです。パックを手にとってみると、大きさと量はほどほどですが、あまり食欲をそそる色と形ではないですね。値段を見ると、「2 for £5」、つまり2つで5ポンドという意味の価格表示があるんですね。「一つなら試食してみたいけど、二つは多いよね」というわけで、買いませんでしたね。ところが、その時に撮った写真を後でチェックしてみると、売り場にこんな表示があったのです。



#### 「Any 2 for £3 Mix & Match across fruit packs」

これをどう訳すべきかわかりませんが、「フルーツのパックは、どれを取っても、2つで3ポンド(450円)」という意味ではないですか。ナーンだ、それならイチゴとサクランボでも買って、二人でホテルで食べればよかったですよ。コレも今回の旅の後悔の一つですね。花の売り場でも、価格帯の低い商品には2 for £5 (2個で5ポンド)などという表示がありましたね。

少し驚いたのは、子供たちが並んでいる劇場らしき建物の大きなポスターに「ALL 5 FOR £55」と表示されていたことですね。5人でまともれば55£(約8250円)で入れるということだと思いますが、一人での入場よりも、かなり安くなっているんでしょう。「沢山買えば安くなる」=「安くするから沢山買って」というのが、英国流の販売法らしいですね。そして、この時にも子供たちの頭上には、大きなゼラニュームの見事な吊り鉢が垂れ下がっていました。



英国に来てから、まもなくカミサンが呟きました—  
「イギリスの家って小さいね」

そうなんです。郊外に行くと、200年以上も経っているような石造りの古い民家が沢山あります。それが民家を改造した小さなレストランであったりするんですね。

私達がオックスフォードの郊外で昼食をとった店はそんな感じでした。

そして、そこで出された料理が名物の「フィッシュ&チップス」—要するに、白身魚のフライとポテトフライに豆を少し付けたという食事です。「美味しい料理」というのではないですね。次の日の昼食に、手違いで同じ料理が出た時には、ほとんどの人が残していましたよ。

英国にはウマイモノがないというより、ウマイモノを求めるような美食の文化がないんでしょうね。国民性と言ってしまうとオシマイですが、「花より団子」ではなく、「団子より花」の文化なのかなという気がします。食物よりも花にお金を使うというのは、スゴイことではないですか。花が生活の中の大切な部分として定着しており、そこには「食よりも心」を大切にするという文化があるのです。TVをつけたら、「これはイケる!」「ヤバいです!」などと絶叫している低俗グルメ番組ばかりが出てくる、どこかの国の方がオカシイのですよ。

英国人の花に対する意識の高さを痛感したことがありました。それはもう20年以上も前に起きた大きな事件で、ダイアナ王妃の事故死(?)の時のことです。その時に彼女を慕っていた沢山人たちが宮殿の前に花を供えたんですね。TVや新聞で見ただけですが、それは大変な量の花束でした。私が驚いたのは、その花束の数の多さではなく、その膨大な数の花束のその後の処理の仕方なのです。その後、新聞の片隅の小さな記事で



知ったことですが、花束はすべて王妃が埋葬された私邸の小島に運搬されて、土に返されたそうです。セロファンやリボンなどを除けなくてははいけませんから、大変な作業であったと思います。花束の一つ一つを、国民の弔意の表現として、大切に処理したということですね。花に対する英国人の姿勢は、「筋金入り」という気がしました。

## ◎英国のパブについて

英国人はグルメ志向ではないですが、お酒を飲むのは大好きとみえて、「パブの文化」があります。なんせ、スコッチを生んだ国ですから、酒を飲むことにかけてはチョッとウルサイのは当然のことです。今回の「気が乗らない英国の旅」に出る前に、私がひそかに決意していた二つのこと。一つは「ワンちゃん」を撮ること、そしてもう一つは「パブに行くこと」だったのですよ。いくら団体ツアーでも、夜はフリータイムですからね。問題は適当な店を、ホテルの近くで見つけられるかどうかでした。

「毎晩パブで飲んでやるか」などと考えていたのですが、実際には2回しか行けませんでしたね。前もって調べるということを全くしていませんから、近くになかったり、遅くホテルに着いて疲れていたりと、いろいろあったのですよ。私の予備知識としての「英国のパブ」は、安い値段で安心して飲める「居酒屋」、知らない者同士でも話ができる「気軽な社交場」、という程度でした。ともかくブラリと入るわけですから、「ボッタくり」の店なんかだったらイヤですからね。

朝の9時過ぎに飛行機に乗り、上海経由でロンドンに着いたのが、現地時間の夜の9時過ぎで、入国手続きをして、空港近くのホテルに着いたのは、10時を過ぎていましたね。それから飲みに行く元気がよくあったと思うのですが、8時間の時差と、機内で寝ていることで眠くならないのです。泊まったホテルは、近くに店があるような場所ではなかったのですが、ロビーにあるレストランが、夜はパブになるというのです。「そりゃ、エエじゃないか。サッソク行って見よう！」というわけです。

一人で行くつもりでいたら、下戸のカミサンも「ワタシも行く!」。機内での夕食が早めでしたから、小腹が空いていたんでしょうね。二人で一階(英国式には地下 **ground floor**)に下りて、パブのカウンターに向います。中には5種類のビールのコックがあり、それぞれに銘柄が書いてあります。そこで私は若いバーテンに向かって、お決まりの台詞を一言。



What kind of beer, do you have?

(どんな種類のビールがあるの?)

すると彼は、アヤシイ英語を話す「アジア系のオッサン」に向かって、いろいろと説明をしてくれます。

ところが、私にはよくワカランのですよ。

仕方なく、前に飲んだことのある「ハイネッケン」をチョイス。

その時に必ず「pint」(パイント)か「half」(ハーフ)かを

ハッキリと言わなくてははいけません。これは添乗員さんに教えてもらいましたね。パイントは英国式の液量単位で 568cc ですから、日本の中ビン位の量、ハーフはその半分です。

それから飲むときにツマミが欲しい私は、再び決め台詞。

Do you have something to eat? (何か食べるモノない?)

すると、Hot dog (ホットドッグ) があるというのです。。二つ頼んで、その場で支払を済まし、ビールを持って近くのテーブルへ。食べ物はあとで、ポテトチップ付きで持ってきてくれましたね。金額は税込で、£ 14. 10 日本円で 2000 円余りというところで、日本の居酒屋と比べると、ちょっと高い気もします。

これは街中ではなく、ホテル内のパブですから、仕方ないでしょうね。







1回目のパブ体験が「不完全燃焼」という感じで納得できなかったもので、ロンドン最後の夜に、ホテルの外へ。時間は夜の10時頃ですが、夜というより夕方という明るさです。歩いてみてわかったのですが、ここはロンドン市内でも中心部ではなく、少し外れの街という感じです。コンビニやスーパーらしき店も見えますから、必ずパブも在るはず。5分余り歩くとそれらしき店が――外にはテーブルがあり、中を覗くと沢山のテーブルのあちこちで飲んでいる男たちの姿と、その向こうにはカウンターが見えます。これは間違いなくパブですね。

中に入ると、お客の入りは半分くらい。まずはカウンターへ行ってお酒を注文します。前回のホテル内パブの経験がありますから、同様の「決めゼリフ」でクリアー。私は国産の地ビールらしきものをチョイス。飲めないカミサンにも何か注文しなくてはけません。

**She can't drink beer. Do you have some kind of juice ?**

(妻はビール飲めないんだけど、なにかジュースみたいなものない?)

と言ったら、<別の飲み物>を選んでくれたので、ハーフで注文。そして何かツマミになるものを頼んだら、ナント「今の時間帯は、料理の担当が帰ったので出来ない」という意味のことをいうのですよ。まだ、10時過ぎ位ですよ。日本の居酒屋だと考えられないことです。私のようにツマミがないと酒が飲めないタイプの「飲んべ」にとって、これは寂しかったですね。英国人は食べるモノがなくても、酒だけでいいんでしょうね。やっぱり英国には「飲みの文化」はあっても、「食の文化」はないのですよ。

結局、ビールとジュース代で5ポンド札を出したら、小銭のオツリが返ってきました。全部で£4チョットですから、600円位ですか。ホテルのパブより、街中は安いようですね。二人で窓側のテーブルに座って、飲み始めます。「ウマいなあ！」イギリスの地ビールもなかなかイイ感じ。ところが、ウチのカミサンが飲み始めてすぐに、妙な顔。「コレって、ジュースじゃないね。お酒が入ってる」「エッ！そりゃマズイじゃないか！」

まるっきり下戸のカミサンは、全くアルコールをウケつけない体質なのです。

「倒れたら困るけえ、エッと飲まん方がエエ」

私の言った英語が不十分で、正しく伝わらなかったのでしょう。カウンターの彼は、ビール以外の軽い「ソフトドリンク」を出したのしょうね。酒が飲めない体質というのは、アジア系の人種のみにあることなので、「欧米人には理解できない」ということを聞いたことがあります。



そんな話をしていると、いきなり「闖入者」(ちんにゅうしゃ)が登場！

ほぼ同年輩とおぼしき小柄なオッサンが近づいてきたと思ったら、テーブルを挟んで向かい合っている私とカミサンの間に、ドッカーリと座ったのですよ。英国のパブでは、知らない者同士が気楽に話をするということは聞いていましたが、こういう形は想定外でした。このオッサンが、いきなりベラベラと話してくるんですが、私は全く聞き取れないのです。ナマリが強いというのか、モノスゴク癖のある英語で、ほとんど何を言っているのかワカラナカッタですね。唯一ワカッタことは、彼の年齢が60歳であることと、「ヒロシマ」という言葉です。私が「日本のヒロシマから来た」と言うと、彼はいきなり激しく反応したのです。私とカミサンの腕を取って、「ケロイドを見せろ」という意味のことを言うのです。「私たちは戦争が終わって、4-5年経って生まれたから原爆には遭っていない」と説明しても、どうも伝わっていないようでした。

ほとんど意思疎通のない会話というもツライので、早々に退散しましたが、彼は一体何者だったんですかね。強いナマリのある英語を話し、脚に障害があるようでした。私達のような「アジア系の老人夫婦」の方が、自国の人たちよりも、自分の話を聞いてくれそうに思えたのでしょう。話し相手が欲しかったのですよ。私の勝手な推察ですが、あのような強いナマリ of 英語と、彼の風貌から見て、彼は「アイルランド系移民」ではないかと思うのです。もう少しじっくりと話してみれば良かったと悔いていますが、一番のネックは私の英語力不足であることは明らかです。

英国からの旅から帰って間もなく、7月18日付けの朝日新聞に、こんな記事を見つけました。

＜英国政府が今年、「孤独担当大臣」を置いた。見知らぬ人ともパブに集い、ビールとサッカー観戦で盛り上がる英国人だが、成人の5人に1人が孤独を感じているという＞

記事に寄れば、＜英国では75歳以上の半数が独居＞であること。さらに新たな問題として、

＜ロンドンの移民・難民の6割弱は孤独や孤立が最大の課題＞と記されています。

「一人暮らし」の老人が多いことは日本も同じですし、「移民問題」はなくても、「外国人労働者」が増えている状況をみると、同じ問題を抱えていると思いますね。



確かに旅行中も、あきらかに「移民の人」と思える人たちが働いている姿が目につきました。主にスーパーやホテルですが、イスラム系やアフリカ系の人たちが多いようです。英国のEC離脱は、「移民難民の受け入れ」に対する国民の拒否が、主な理由であると聞きました。

このことは、経済の発展よりも、自分たちの「静かな生活」を

守ることを、英国人は優先したということでしょうね。

何代にも渡って、古い家と家具に囲まれた生活をして、スポーツとパブを楽しみ、花とワンちゃんを愛する英国の人たち。

私には、これからの日本人の生き方の模範になるような国に見えましたが、やはり「いろいろな悩み」を抱えているようです。

「なんばイギリスが災害の少ないエエ国じゃいうても、ワシはヤッパリ

日本の方がエエワイ。食い物が合わんいうのは、どうにもならんけえのう」

◎次回は「大英博物館にて」を載せる予定です。